'86 第3回 しながわ 平和のための戦争資料展

戦争――そのとき父母は　兄姉は　子どもたちは

＜父や夫や兄は＞

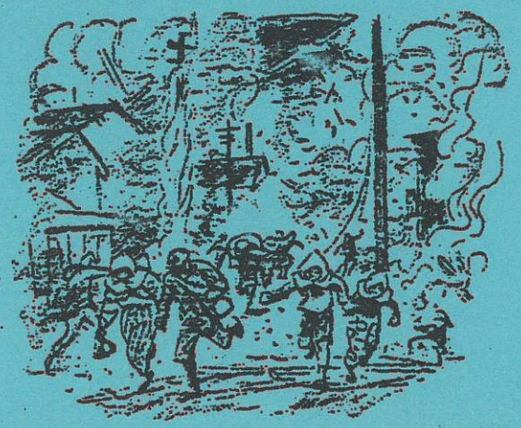
「赤紙」一枚で、うむを言わせず家族と引き離され、絶対服従の軍隊生活。そして残虐非道な作戦も実行させられた。ついには白木の箱での返還・・・・。むごたらしいすべてが、天皇の軍隊・「天皇の命令だ」と信じこまされて・・・・・。敗戦とともに戦争犯罪者として、自らも加害者となったことへの反省には、長い時間がかかった。
再び「鬼」にならないために・・・・・。

＜兄や姉は・・・学徒勤労動員＞

戦争末期になると、学校では授業を行うという通常の光景さえ姿を消すようになりました。学徒勤労報国隊が結成され、学徒は工場・鉱山・農村の勤労奉仕へと駆り立てられました。

区内の主な学校の動員先

- 杉野女学院・・・・・陸軍被服廠・藤倉ゴム
- 都立電気工業学校・・藤倉電機
- 品川高等女学校・・・明治ゴム・藤倉電機
- 立正学園女子高等学校・・・品川製作所
  日本気化器
  日本ゴム



＜母は・・・銃後の婦人＞

当時の女性の多くは、けっして戦争をのぞんでいたのではありませんでした。父や夫や息子たちを戦争で死なせていいとは思っていなかったはずです。にもかかわらず、銃後の守りが戦地を支えると信じて戦争への協力をしいられたのでした。政府や軍部は早くから戦争に備えて国家総動員体制をつくり、女性を積極的に利用しようとしました。

特別企画・・・映画・スライド・教科書展示

＜子どもたちは・・・学童疎開＞

学童集団疎開は戦争がしだいに悪化し、敵の空襲のはげしくなってきた昭和１９年８月に実施されました。当時国民学校３年から６年までの児童が、親もとをはなれ教師とともに田舎で寝起きをともにしました。家族をばらばらにし、早くから一人立ちをしいられた学童集団疎開を、子どもの視点からみなおしてみました。

＜戦時下の子どもと教育＞

軍部や政府は、日本の戦争は正しいのだと新聞やラジオなどで報道し、国民全体を戦争へとかりたてていきました。

日本全体が戦争一色でぬりつぶされていくなかで、力を入れたのが学校教育でした。

「戦争につながりをもたない教育は日本国民の教育とはいえない」とまで言われ、学校での授業の他、学芸会、運動会はもちろん、子どもたちの遊びの中にまで、戦争の影響をうけたものがたくさん考えだされました。

子どもたちが兵隊にあこがれ、すすんで軍隊に入り兵隊となって御国のため、天皇陛下のため、戦って死ぬことが名誉なことであると考えるように教え込まれたのです。

＜中国に残された子どもたち＞

「中国残留日本人孤児」とよばれる人たちについて、新聞やテレビの映像に目をとめたことがあるでしょう。

彼らを孤児のまま４０年もの間、他国に置き去りにしてきたのは、いったい誰なのか。残され、置き去りにされた子どもたちは、その生涯の半分以上を、自分が誰なのかもわからないままに、ひたすら祖国と肉親とのつながりを求めて今日に至ったのです。

子どもたちが、なぜ中国に残されたのか、その原因を歴史の中にたどり、中国に渡った彼らの親たちのくらしの記録や証言にもとづいて、その経緯を探ってみました。

8/11(月)～14(木)
AM10：00～PM8：00
（14日のみPM6：00）

私たちの歩み

- 1984. 8. 8～11　第1回平和のための資料展
  9. 29～30　都教組フェスティバル展示
  12. 8　第1回平和を考えるつどい
- 1985. 3. 9～10　東京空襲４０周年祈念のつどい
  6. 1　南部空襲４０周年城南のつどい
  8. 7～10　第2回平和のための資料展
  12. 6　第2回平和を考えるつどい
- 1986. 4. 6　学童疎開地めぐり
  8. 11～14　第3回平和のための資料展

戦争中の遺品・写真・諸資料をご出品下さい。

主催・しながわ
「平和のための戦争資料展」実行委員会
（787－1522　田所）